

第43号 華山会報

令和元年12月1日

公益財団法人華山会

華山が眺めた渡良瀬川と田中正造

佐野市立吉澤記念美術館学芸員 末武 きとみ



加藤氏克己氏連載参照。

華山が眺めたこの豊かな風景は、約六十年後の明治半ばに一変する。足尾鉍毒事件の舞台となったのである。明治二十三年（一八九〇）の台風による渡良瀬川の氾濫で、上流の足尾銅山からの鉍毒が下流域の土壌を広く汚染し、多くの住民を苦しめた。この問題に取り組んだのが、足利の隣、佐野出身の田中正造（一八四一—一九一三）である。衆議院で政府の責任を厳しく追及するが最終的に辞職し、同三十四年に天皇直訴を試みる。鉍毒被害の深い谷中村を廃村して遊水池（現・渡良瀬遊水地）とする政府の対応策に、正造は住民と共に抵抗し、銅山の操業停止を求めた。そして晩年は氾濫を繰り返す渡良瀬川の河川調査をして歩き、川岸の支援者の家で逝った。

ところで正造が少年時代を振り返った「正造昔話」（『読売新聞』明治二十八年）に、華山の名が見える。十四歳の頃「予は又た近村なる葛生町の人吉澤松堂（竹画に長ず渡辺華山と友たり）に就いて画を学ばんとし」という。松堂は醸造業を営み年番名主も務める傍ら、画を描いた。高久靄厓や大橋淡雅と親しく、「蚕社の獄」の際には救援活動に加わり、華山の書簡にも名が見える（天保十一年六月十七日付）。これに先立つ天保九年八月、華山は松堂に宛てて『風竹図』（吉澤記念美術館寄託）を描いている。華山献策の「報民倉」により天保の飢饉を乗り越えた田原藩主が、幕府から褒詞を受けた直後の作である。その讚に、清の墨竹の名手・鄭板橋の「竹の葉音に民の苦しみを思う」という内容の詩を引き、「この詩の意味を解し貧者を庇護してほしい」と記している。正造がこの画を見たか否かは不明だが、若くして名主となつてから最期まで「民」のために働いた正造にふさわしい詩である。華山自刃の翌月生まれの正造少年に、松堂は華山のことを語つただろうか。華山門人たちも多く往来した幕末の当地で、華山はどう語られただろうか。

今秋東日本を直撃した台風十九号は、渡良瀬川のいくつもの支流を氾濫させ、佐野や足利を含む流域の町々に大きな被害をもたらした。美術館の事務棟や敷地に流入した泥・土砂に川の力を痛感し、ゴミ集積場で泥まみれの家電や家具の山を見上げる日々に、右のようなことを考えた。

『全樂堂記伝』(二)

— 華山伝記の根底テキスト —
 研究委員 別所興一

「華山会報」41号で紹介したように、三十一歳の華山・渡辺登は、結婚を契機に自省のため「心の掟」を定めた。翌文政七年(一八二四)に、長年病床にあった父定通が逝去した。華山は涙にむせびながら、父の遺影を写生し(「渡辺巴洲翁像」)、その遺骸を江戸小石川にある菩提寺・善雄寺に葬った。家督を命ぜられ、遺祿八十石を継いだ。

翌文政八年の夏、病氣湯治の名目で暇をもらい、上総・下総・常陸・武蔵の地に遊び、名作「四州真景図」を描いた。この年、掛川藩儒・松崎慊堂に師事して儒学(考証学)を学ぶようになった。

文政十年(一八二七)七月、田原十三代藩主・三宅康明が病没し、その後継をめぐる藩議が分裂・抗争し

た。藩の宿老たちは、困窮した藩財政の打開策として大藩から持参金付き養子を迎えることを画策していた。これに対して華山ら革新派は、

四州真景図



南朝の忠臣・児島高德(典拠は『太平記』のみ)を藩祖とする三宅家の血統を断絶すべきではないという立場から、前藩主の異母弟・友信(十一代藩主康友の庶子、母は側室於銀)の後継を主張して譲らなかつた。

宿老たちは自分たちの画策に邪魔立てさせないため友信を江戸から遠ざけようと考え、友信に田原行きを勧めた。同年十月、友信は華山・上田喜作・萱生玄順の三人を従えて田原に向出した。彼らが田原滞在中に宿老たちは、姫路藩酒井侯の六男・稻若(康直)を田原藩の急養子とすることを決定し、幕府の許認可を得たため、華山らの画策は後の祭りとなつた。そのあたりの事情については、『全樂堂記伝』は「伯登(＝華山)兼テ家統ノ事ニツキテ願ハシキ志ノアリツレバ、留ルニ付テ方々ノ士共ニモ謀リ、又執政(宿老)ニモ言フコト屢ナレドモ甲斐々々シカラザリシトカヤ」と記している。

要するに、友信後継の正統性を各方面の藩士に訴え、藩重役にもしば

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 華山が眺めた渡良瀬川と
 田中正造 末武さとみ

P ② 全樂堂記伝(二)別所興一

P ⑥ 渡辺華山『毛武游记』②⑩

P ⑩ 四州真景の旅 ⑥

P ⑫ 少年物語渡辺華山
 読書感想文

P ⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館

田原市渥美郷土資料館

からご案内



しは進言したけれども、徒勞に終わったことを物語っている。華山はその後しばらく、連日のようにやけ酒を飲む狂乱状態に陥った。その自墮落な生活は年を越しても治まらず、孤独感を深めていた。その頃、国元へ帰る藩重役の一人から画を求められたので、以前に描いた梅の画に、次のような詩を添えて手渡した。

**世上群葩醉暖風 独醒佇立寂寥中
誰憐一樹雪霜後 貞固正与松栢同**

世の多くの人々が暖風に酔いしれている中で、私は独り醒めて寂しく立ち尽くしている。この冷たい孤独に耐えている私を、誰一人憐れむことをしない。しかし、貞節を守ろうとする私の志は、松や栢のように固く、動揺することはない、という大意である。

藩重役は友信廢嫡の理由を「病弱」と公表していたが、友信は八十一歳の長寿を全うしている（一八八六年没）から、まったく虚偽の口実だったことが分かる。

藩重役に擁立された新藩主・三宅

康直は、少壮気鋭な友信を江戸巢鴨の下屋敷に隠居させたが、田原老公（元藩主）という敬称で呼び、反対派の指導者格だった華山を側用人に抜擢し、併せて友信の秘書役を申し付けた。こうした一連の人事は、康直の実家である酒井家から派遣された付け家老・河合隼之助の入れ知恵だったと言われる。

この記事の後に、友信が生母・於銀（友信出産後まもなく田原藩邸から暇を出されて相模国の里人になっていた）を巢鴨屋敷に迎えようと考えていたことから、華山が友信の意を受けて現地に出向した記事が見られる。

実際はそれより三年後の天保二年（一八三二）に、華山は相模国厚木の村里を訪ね、一介の農婦となった於銀との再会を果たしている。その再会の感動的な情景は、華山の紀行文『游相日記』にいきいきと再現されている。於銀はつましいながらも平穩な家庭生活を営んでいたから、巢鴨邸への移住を求めることはでき

なかった。しかし、後年友信と面会させ、その際に若干の金を恵んで田畑を買わせたことを追記している。

文政十二年（一八二九）の初めに前年から始めた「日省課目」と称する生活時間割とその心得を、次のように書き留めている。

一、朝は四時ころ起床して以前に読んだ本を復習し、いくつかの篇を朗読し、常に暗唱するように努める。

また、過去の画法書や名画を思い描いて、今日為すべきことを考えるようにする。

二、朝六時には読書したり、子供たちを教授したりする。

三、早めに食事を終えて、六時と同じ課業をしたり、武備を準備したりする。

四、日中の十時には画を人の求めに応じて描く。この時間帯に素晴らしい画を模写したり、画法書を写したりする。必ず画技が進歩するからである。しかし、家計が困窮しているため、作画を売って飢えをしのいでいる始末である。それ故、一日画を

作らなければ、一日分の困窮が増すことになる。ただ自身が困窮するだけでなく、母や祖母への孝養に不足をもたらし、妻や弟妹たちの養育にも事欠くことになる。私の画作は、あたかも農民たちが漁労や狩猟で生計の足しにしているように必要不可欠な営みである。こんな状態をどうして嘆かずにおられようか。

五、正午前後も十時の課業と同じである。或いは君親に仕えたり、賓客に応待したり、諸事万端をこの時間帯に集中して処理する。もしもこの時間帯に完了できなかった場合には、その後の時間帯で補うことになる。

六、午後二時の時間帯も、正午の課業と同じであるが、午後四時には意のままに名画の模写などに努めて、極意を達成するとよい。

七、日暮れの六時には自分の意のままにさまざまな書籍を閲覧したり、書き抜いたり、詩文を作ったりするのが、最もよい。ただし、その日の功績を数えて記録し、それを途絶さ

せないようにすべきである。

当時の華山の刻苦精励の日々の姿が、思い浮かぶ記事である。

他方、華山はこの年から、藩命により三宅家の家譜調査の業務に取り組みることになった。この業務を引き受けた心境について、華山は次のように述べている。

「我侯ニハ史官モナキ故、自然ニ先世ノ事分明ナラザレバ、政事ニ於テモ此弊ハ何ヨリ出ルヤ、此利ハ何ヨリ出ルヤトイフ事審ニ知ラレザルニ至リ、容易ナラザル事ナリ。一体諸役所共只眼前ノ事ニ追ハレ、遠慮致ス間モナク、其上世風年ヲ逐テ移リ変リ、旧例ハ今ノ用トナラザル故元ニ返ル事ナク、殊ニ近世ノ火災ニテハ諸記烏有トナリ、嘆息ニ堪ヘズ」

我が田原藩の殿様は、藩の歴史を担当する役職がないために、先代の出来事がよくわからず、政治を進めるにあたってこの弊害や利得はどうして生じたか、その詳細をとらえられなくなつた。憂慮すべき事態である。さまざまな役職にある多くの者

は、眼前のことに追われ、ずっと先の時代の事を考える余裕を失っている。その上、世間の風潮は変化が激しいだけに、旧例は役に立たないと考えて、過去を省みることがなくなつた。しかも最近では火災でさまざまな記録類が煙滅するのを見て、心配でならない、という大意である。

こうした事態を打開するために、華山は歴史書編纂の先学に学んで、藩祖の關係する地域の遺跡を探索し、古文書・碑文の収集・調査、現地の故老からの聞き取り、関係分野の文献調査など、取りこぼしのないよう万全を期した。およそ九十余巻の家譜を構想し、手始めにその目録と解題を提出した。

明けて天保元年（一八三〇）正月には、武蔵国みかじ（埼玉県熊谷市）の三宅家の旧領を訪問調査し、翌年『訪録』三巻を起草し、藩主に上程している。

天保二年（一八三一）には華山は、後に華山の海外事情研究の重要な協力者になる蘭方医・小関三英と相識

り、ケンペルの『日本誌』を入手している。また、先に紹介した相模国厚木への旅行の直後、華山の妹・茂登の嫁ぎ先である上野国桐生（群馬県）やその周辺の下野国足利（栃木県）などを旅行し、旅日記『毛武遊記』を書いている。しかし、この年の一連の出来事の記事は、『全楽堂記伝』から全く抜け落ちていた。

翌三年五月に四十歳の華山は、年寄役末席（江戸詰め家老）となり、禄百二十石を給せられた。

当時の華山は、朱子学的な大義名分論を相変わらず人生観の基本にすえていたから、藩主の血統を守ることを藩政の根幹として重視していた。側用人時代から藩主康直に直談判し、次の藩主を三宅友信の長男・伯太郎くわにすることを承諾させようとつとめ、藩首脳部への多数派工作もしていたが、目に見える成果は上げられなかった。しかし、この年の三月に康直の奥方が女子おけい於銚けいを出産したことから、華山ら復統派は康直や年寄職らに猛烈な働きかけをし、鈴

木弥太夫ら反対派を押し切つて於銚を伯太郎の配偶者とし、伯太郎の藩主後継を承認させた。そして、同年六月十一日には同趣旨の願書が幕府に認可され、表向き御広メとなつた。華山は宿願を果たせただけでなく、藩主から次期藩主伯太郎の介添え役の兼任を命ぜられ、その養育を担当することになったのである。

家老職就任早々に直面したのは、紀州藩商船の難破・漂着事件だった。

同年七月に藩領の遠州灘沿岸に紀州藩商船が漂着した際、沿岸の村人が漂着した材木などを略奪したことから、荷主がその弁償を公儀に訴えたため、大騒ぎになった。その弁償金は貧しい村人ではとても払いきれないだけでなく、御三家である紀州藩への対応を誤ると田原藩主の解任問題にもなりかねない事件だったため、華山が奔走して紀州藩重臣や主管の幕府役人などに直談判した結果、ようやく少額の弁償金で済む示談にこぎつけることができたのである。

恩義を感じた村人は華山に謝礼金を届けようとしたところ、華山は役目柄当然のことをしたまewith と言って受け取りを拒否した。しかし、何度も押しかけるので、一応受け取って村役人に預けおき、他日の村民窮乏の手当てとしたという。

この年の華山自筆の日記『全楽堂日録』の年末の記事に「このとし窮迫きハまり衣服書物など質（質屋）にいらて年をむかふ。ことし八月来此難船の事にかゝづらひ、又助郷御免（免除）の事にあづかり、……又、麴町二丁目より失火、……唯々塵俗にむ（埋）もれはて半年の夢の如くなりき。誠に身に寸得ハなけれど、たゞ多くの百姓を蘇せしめし（よみがえらせた）事かぎりなきよろこびなるのミ」とあることから、質屋通いする身で領民救援に奔走する多忙な一年だったことを物語っている。

翌天保四年（一八三三）に華山が家譜調査のため出かけた旅行については、「**扱田原封内ヲ巡覽シ、地勢国俗ヲ察シ、遂ニ船ニテ近海ノ諸島**

ヲ一覽シ、又拳母梅ヶ坪（豊田市）等ニ至リ、先君ノ旧跡或ハ其ワタリニ存セル口碑書伝へ杯ヲ尋求メントテ、岡崎マデ出シニ、無抛公事急ニ出来ルヲ以テ驟ニ田原ニ還リ、五月朔田原ヨリ帰ル」と記されている。

華山はこの旅行で、城下町だけでなく、渥美半島沿岸の村々や神島・佐久島などを歴訪し、三宅家の旧領である拳母梅ヶ坪まで足を伸ばして調査しようと岡崎まで来たところ、藩から急報が届いたため、急いで田原に戻り、江戸屋敷まで急行しなければならなかった。

この急報とは、先に紹介した紀州藩商船の難破・漂着事件の最終談判に関する知らせだった。この最終談判は、華山以外の別人が代行できるものではなく、華山独自の人脈や識見に拠らなければ成立しがたいものだったからである。

この旅行のようすは、華山の旅日記『全楽堂日録』『客参録』『参海雑志』に明治の新体詩や散文を思わせる新鮮な文体により、スケッチ入りの

で、いきいきと表現されているので、ぜひ参照されたい。

この年の九月には田原藩に対して領内の入海（現在の汐川干潟のあたり）を干拓して新田を造成せよ、という幕命が下り、近く幕吏が検分に出向くという通達があった。尾張商人と幕吏の結託事業で、魚貝類の採取を生業にしていた沿岸漁民にとっては一大脅威だった。この事件に対して華山が考え実行したことは、「斯マデ切ギリニ開墾ヲ求メテ、官吏官勢ヲ挟ミテ吾民ヲシテ苦ヲ称ゼシメザラシムルハ、大盗ノ小婦ヲ掠メ老父ノ児食ヲ奪フ如シ。其実ハ上ノ知シ召サルゝ事ナラズ。豪農奸商税官ニ賄フテ官命ヲ下シ、勢威ヲ以テ我ニ逼ルナリ。然ルヲ官吏是ガ為メニ媒ヲナシテ、其預ル地ノ人共不可セルヲハ嚇シ、順受セルヲハ撫スルコトナント、皆重税（重税）ノ致ス所、悪ムベキノ甚シキトテ、三月吾侯ノ願状ヲ草シヌ」という次第だった。

この新田開発計画に対して華山

は、沿岸漁民の生活の資を奪い去るだけでなく、海防上からも自然の要塞を失って無防備となる危険があるという理由をあげ、撤回を求めると願書を作成した。請願書は翌年三月に閣老と勘定奉行に上程され、九月に受理され、以後沙汰止みとなったのである。

その結果、華山の政治手腕が、藩の内外において認められるようになったと言えよう。



参海雑志

渡辺華山『毛武遊記』

20

研究会員 加藤 克己

天保二年（一八三二）十月二十二日続き

華山一行は足利学校を訪れていた。父親から像の底に何か書いてあると聞いていた岡田東鳩が、和尚の留守をいいことに、聖像（孔子像、像高七十八センチメートルの坐像）を動かして、その胎内銘をこっそり読もうと提案した。華山は、いけないこととは思いつつも、好奇心を抑えられず、即座に賛成した。聖像を動かして、聖像の底板の割れた穴から中を覗くのだが、なかなかうまく光を当てることができず、文字を読めなくて苦労していた。

いざや快いたし奉りなん、御簾得か、げ候へといふやいなや、昌庵外面よりはしり来、和尚来れりく〜とさげぶ。

「さあ（聖像を）気持ちよくさせてあげよう（明るい所へ出してあげよう）。御簾をしっかりと上げててください」と言っていると、昌庵が外から走って来て、「和尚が来た。和尚が来た」と叫ぶ。

※ 昌庵 奥山昌庵。第11回（34号）参照。昌庵は外で見張りをしていた。

※ 和尚 足利学校第二十一世座主大嶺和尚。越後長岡（新潟県長岡市）の人。

こはいかにせんと、あはてふためき、いれ奉んとする。各々力いだせど齊しからざれば、互二なりて快厨子に入玉はず。近江屋ハ前に立ふさがりて院僧に見せじとすれバ、中ハ暗夜になりて、手の置所もしれず。とかくする中に和尚入来り、あきれに〜て物をも得言ず。眼見はり眉ひそめ御階の上にな、ずミ、何をかいひ出んとす。

（華山たちは）さあたひへん、（見つかってしまふ）どうしたらいいだろうかとあわてふためき、聖像を元あった位置にお入れしようとする。それが力が出したが、（あわてているので呼吸が合わず）皆が同時に力を出すことができないので、うまく厨子の中にお入れすることができない。近江屋が前に立ちふさがって和尚に見せないようにしたので、中は暗夜のようになってしまつて、手の置き所もわからない。そうしているうちに和尚が入って来たが、（和尚は華山たちの行為に）あきれにあきれて、ものもよう言えない。やがて、眼を見開いて眉をひそめ、階段の上に立ち止まり、何かを言いだそうとする。

※ 厨子 その中に聖像が納まっていた。

※ 近江屋 近江屋忠七。第15回（38号）参照。なお、「忠四郎」「忠助」の名で登場することもある。

※ 院僧 寺院の僧侶。ここでは、「和尚」と同一人物を指す。

今ハせんすべなくていふやう、和尚今日はよき折からにて人もふでぬぞ。かの法師のいえる、いとよしとぞおもはる。さては孔夫子は我輩の尊崇する所にて、和尚などの儒仏同一の学ハしられども、せめて今日のありがたさに御兎のほども写し、かつむかしより申伝えたる御肚裏の内に題名あるよしなれど、いかにあるや聞及ぬ事なり。定めし御僧にハいつか読玉ふなるべし。御物語候へといえバ、僧きもをけし、左に候。左様の事申伝れど、未何と申事侍るやしらず。

（見つかってしまったので）今となってはもう（隠しようもなく）どうしようもなくなつたが、（華山が機転をきかせて先手をうって）、「和尚さん、今日はちようどよい折からで、人は詣でていますよ。かの法師の言える、たいへんよい日と思えます。そしてまた、孔子様は私の尊崇する人でして、（私は）和尚さんなどの儒仏同一の学は知りませんが、せめて今日のありがたい日に聖像の御姿を写し、かつ昔から言い伝えられているところでは像の腹の中に文字が書いてあるということですが、どのようなことが書いてあるのか、聞いたことがありません。きつと和尚さんはいつか読まれたことでしょうか。お教えください」と言つた。すると、和尚はたいへん驚いて、「そのとおりです。そのようなことが申し伝えられています。未だ何が書いてあるのか知りません」と答えた。

※ 折から 折柄。その物事にふさわしい折。



足利学校孔子廟

ちようどよい折。

※ もふでぬ 詣でぬ。参詣する人がいない。

※ かの法師 不詳。

※ 孔夫子 孔子のこと。紀元前五五一―前四七

九。姓は孔、諱は丘、字は仲尼。孔子は尊称。

夫子は先生への尊称。中国春秋時代の魯の思

想家で、儒家の祖。

※ 儒仏同一の学 儒教と仏教の説くところは同

じだという学説。第18回(41号)には「儒釈

同一之学」とあった。

※ 兎「貌」と同じ。姿。形。顔。

※ 御肚裏 腹のうち。

※ きもをけし 「きもをつぶし」と同じ。たいへ

ん驚き。

※ 左に候 然候。そのとおりです。

※ 左様 然様。そのよう。

こはいかに。御住持(持)の知り玉ハぬと申せば、
寺社御奉行より御たずねの時、さしあたり御こ
まりなるべし。いざ及ばぬながら、我輩此あり
がたきに読て奉らんといふ。皆一同にこは一段
の御事や、皆此輩ハ江戸の大儒共なれば、時
もつさずよミ取べし。御僧などわずらはし申ま
じ。かやうに本読候もの、集る事またあらじ
と申せば、

(そこで華山はたたみかけて)「これはどうい
うことでしょうか。御住職がお知りにならないとい
うのであれば、寺社奉行様からお尋ねの時、さしあ
たりお困りになるでしょう。さあ、及ばぬながら、
この私がこのありがたい日に読んでさしあげまし
よう」と言う。(華山といっしょにいた)皆がい
っしょに、「これは格別のことでございます。皆
ここに居るのは江戸の優れた儒学者たちですか
ら、たいして時間をかけずに読み取ることではし
ょう。御住職をわずらわすことはありません。この
ように本を読む人が集まることはまたとないでし

よう」と言えば、

※ 住持 住持が正しい。一寺の主僧。住職。

※ 寺社御奉行 寺社奉行。江戸幕府では三奉行

の最上位で、老中の下に属し、全国の寺社お

よび寺社領の管理、宗教統制全般をつかさど

った。

※ 一同に みんなが同時に同様の動作、行為な
どをするさま。いっしょに。

※ 一段 ひととき程度がはなはだしいさま。き
わだつているさま。格別の。

※ 大儒 すぐれた儒学の学者。りっぱな儒者。

※ 江戸の大儒共 華山一行の多くは足利や桐生

あたりの人だから、「皆……江戸の大儒共」と

いうのは事実ではないが、和尚を説き伏せる

ためにこう言ったのだろう。

僧も理にふくせしや。又寡は以衆に敵せずとや
思ひけん。左あらバ御読被下べし。いざや御像
も此あかき方に持出よといふま、各力をあわ
せ明処につきて読了り、又御顔御ありさまをう
つし寸尺をとりてもとのごとく入れ奉たり。

和尚も(華山たちの言うことが)道理になつ
ていると思つて従つたのだろうか。それとも一人
では大勢を相手にしてはかなわないと思つたのだ
ろうか。和尚は、「そうであるならば、お読みに
なつてください。さあこの御像ももつと明るい方
に持ち出してください」と言うので、(華山たちは)
それぞれ力を合せて明るい所へ持つて行つて読
み終わり、また御像の御顔や御姿を写し、寸法を

測って、元のように厨子の中にお納めした。

※ 寡少ない。ここでは一人だけ。

※ 寡は以衆に敵せず「衆寡敵せず」とも言う。

『孟子』梁恵王上から。

※ 左あらば 然あらば。そうであるならば。

※ 力をあわせ 力を合わせたのは、聖像を動かすことだけだったのだろうか。胎内銘を読む時、みんなで読んだのだろうか、他の人はあきらめてしまつて華山一人に任せてしまったのだろうか。他の人もこの時の記録を残していてもいいと思うのだが、華山以外の人の記録は未詳。

※ 読了り 華山の読み取りについては、第18回(41号)に詳述。孔子像は中国製という伝承があったが、華山が胎内銘を読んだことで、戦国時代の日本製と分かった。

※ 寸尺 (尺貫法で長さを表わす場合、最もよく用いられた寸と尺から) 長さ。たけ。寸法。聖像の絵と寸法が、『毛武遊記』には載っていないが、同年の『客坐録』に載っているのので、ここに紹介したい。なお、華山は一カ月後に『足利学校孔子像』を描いており、それは『錦心図譜』に載っている。

底板の破損穴について

造底の破損穴は、この時(和尚が来る前か後かは不明)、華山たちが無理やりに底板を壊して中をのぞいたとされている(足利市教育委員会『足利学校孔子像修理報告書』)が、それはどうだろうか。底板を壊したのなら、前回載せた、底板裏

面の銘にも気づいただろう。底板は華山が見る前から壊れていたのではなからうか。岡田東鳩は底に文字が書いてあると言っていた。底の破損穴から覗いたら、たまたま背中裏の銘が見えたから、底の銘のことは意識から消えてしまったのだろう。

孔子像の測量図 渡辺華山『客坐録』天保二年

『復刻渡辺華山真景写生帖集成 第二集』(鈴木進編 昭和五十一年 平凡社教育産業センター)より。

顔



正面



抑々此御像ハ孔夫子の御像とハ、いと打かわりたる御ありさまなり。或は林逋、陶仙(潜)の像と申もことほりなり。立原杏処(所)此地いたり、こは篋脚の御像にもやといひしも、また理りにちかし。

そもそもこの御像は、孔夫子の御像とはたいへん変わった御様子である。あるいは林逋か陶潜の

『四州真景の旅』⑥

旅先で訪ねた人物 久保木清淵 続編

研究会員 中神昌秀

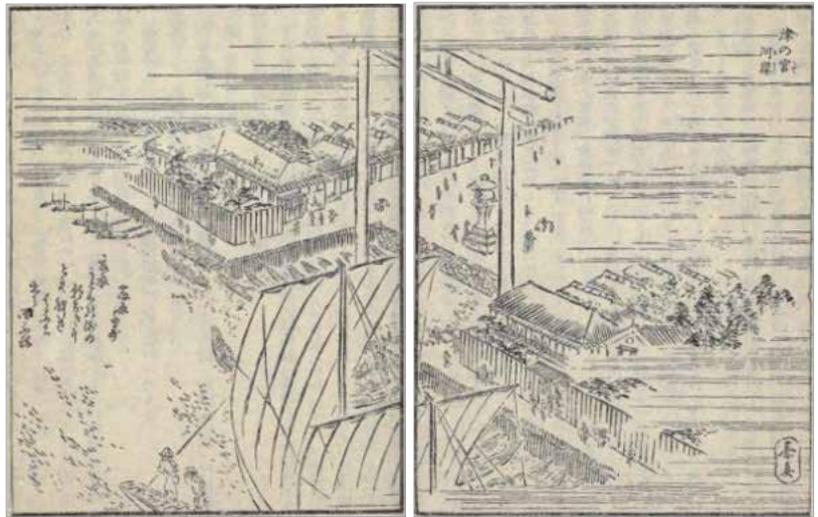
一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』（重要文化財、個人蔵）を制作します。その旅の途中に訪ねた人物が、下総国香取郡津宮村（千葉県香取市）の名主 久保木清淵（一七六二～一八二九）です。清淵については前回、華山会報第四二号で書きましたが、今回は続編として、清淵が名主を務めた頃の津宮の様子、及び清淵と華山の関係等を訪ねる旅をしてみたいと思います。

二 『利根川図誌』に見る津宮河岸

華山は三宅坂の田原藩上屋敷を出発し、日本橋小網町から下総本行徳河岸（千葉県市川市）へ船で渡り、陸路、木をろし道（木下街道）を北上します。白井宿（千葉県白井市）で一泊し、木下（千葉県印西市）まで行き、そこからは、木下茶船と呼ばれた舟で利根川を下り津宮へ向かいます。

さて、『四州真景図』の釈文（本文）ですが、「可亥刻達津宮投佐原屋」とあります。午後十時に津宮に到着することができて、佐原屋に投宿したという意味になります。



利根川図誌 津宮河岸
国立国会図書館デジタルコレクション

『四州真景図』では、釈文だけではなく、ほぼ同時代の安政五年（一八五八）、下総国相馬郡布川村（茨城県北相馬郡利根町布川）の医師赤松宗旦（一八〇六～一八六二）が、利根川の地誌を記録した『利根川図誌』という文献があります。そこには、『利根川図誌』の解説として、「津の宮河岸一の鳥居水中に建てり。（これより香取へ陸十六丁）三社参詣の人、この河岸より上り神宮へ参詣す。」と書かれています。



津宮河岸の常夜灯
香取市指定有形文化財

また図があり、当時の津宮河岸の繁栄の様子がよくわかります。図には、大鳥居が真ん中に描かれています。そして、鳥居の後ろには大きな常夜灯が見えます。これは現存しています。コの字型に切れ込んだ河岸の両側には旅籠らしき家屋が連なっているのが見えます。佐原屋はこのどこかの旅籠だったのでしょうか。

三 『四州真景図』

清淵訪問に関する想い出

『四州真景図』の釈文は「久保木太良右衛門ヲ訪」と続きます。これは、久保木太郎右衛門を訪問したという意味になります。訪問時華山は三三歳、久保木清淵は六二歳でした。

ここは、実は想い出深い箇所です。私が華山・史学研究会に入会したばかりの頃、小澤耕一先生が講師となって、『四州真景図』をテキストに原

典の講読をしていました。当時は会員が順番に説明して、小澤先生が解説をするという方法でした。先程説明した釈文を含む何行かが、私の当番の箇所でした。

この部分を読んだ頃は、なぜ華山が夜十時過ぎに、また、名主とは言え武士でもない清淵を訪問したのかが、疑問でした。現代でも、普通は訪問しない時間です。こんな時間に訪問するということは、それなりに親しい間柄で、しかも事前に連絡がしてあったことであろうと思いました。小澤先生が説明してくれるのかなと期待していると、何の説明もなく次へ進んだような記憶があります。疑問は、解消されないうままでした。

四 清淵訪問とその紹介者

華山が清淵を訪問したのは、どのような関係からなのかは、不明だとするのが最も妥当な結論かと思えます。そうは言うものの、あえて書くならば、銚子での滞在先である、下総国海上郡荒野村(千葉県銚子市)の富豪 大里庄治郎(一七八三〜一八四五)の紹介が考えられます。大里の俳句の師である今泉恒丸(一七五一〜一八一〇)は佐原に住んでおり、清淵の津宮とは同じ香取郡になります。恒丸の墓の碑文は清淵が書いており、二人は関係が深かったと想像されます。従って恒丸の高弟である大里とも交流があり、ぜひ久保木清淵先生をお訪ね下さいなどと、大里からの助言があったのではないのでしょうか。

もう一つは、谷文晁(一七六三〜一八四〇)門下で、文晁四哲の一人でもあった水戸藩士の立原杏所(一七八六〜一八四〇)の紹介というのもありそうに思います。華山と杏所の付き合いについては、文政六年(一八二三)に華山が書いた『心の掟』の中に杏所の名が出てくるので、文政八年の四州真景の旅以前から関係があることが判ります。そして、杏所の父立原翠軒(一七四四〜一八一三)は水戸徳川家で『大日本史』編纂を行う彰考館総裁を務めており、南郡奉行の小宮山楓軒(一七六四〜一八四〇)は、翠軒の弟子に当たります。清淵は楓軒が文化四年(一八〇七)に開いた延方学校(後に延方郷校)に招かれ、講義をしているので、清淵のことも杏所から聞いていたのではないのでしょうか。

華山は清淵を訪問した翌日には、延方郷校で清淵と共に儒学を講じている、水戸藩士の宮本茶村(一七九三〜一八六二)に会います。また、釈文の中に、楓軒の勸農(農業振興)の話が出てくる等から、水戸関係の線の方が可能性が高いのかもしれないと推察します。

五 清淵の印象

華山が津宮で清淵を訪問した際、清淵の容貌が、江戸初期の陽明学者であった中江藤樹(一六〇八〜一六四八)に似ていると華山が言ったという話が、『楓軒紀談』の中にあります。そこには「華山、津の宮の蟠龍先生の顔、よく藤樹先生の像に似たり。見られよとて、藤樹の肖像を示す。實にその



久保木清淵

趣よく似れるは奇なることなり。宮本尚一郎話」とあります。

華山が茶村に会った時、清淵の容貌が中江藤樹に似ているという印象を、茶村は華山から聞き、それを楓軒に話し、『楓軒紀談』の中の記述として残ったものです。

この話の根底には、単に容貌が似ていたというだけでなく、清淵が藤樹にも匹敵する儒学者であるという想いを華山が懐いたからではないでしょうか。

六 終わりに

次回からは、『四州真景図』の名品について、連載の予定です。それではまた。

※連載中に、一度紹介した参考文献は紹介を省略しています。

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、二六〇点の応募をいただきました。

この中から優秀賞五点と嚶鳴協議会長賞一点

の作品をご紹介させていただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



「少年物語 渡辺華山を読んで」

中山小学校 六年 川口 藍

僕が渡辺華山を知ったのは、小学三年生の時でした。池ノ原公園に銅像があり「誰だろう。」と思いに母に聞いたことを覚えています。だから、今回、学校で「少年物語 渡辺華山」が配られて、また興味をもちました。

華山は、田原藩の家老ですが、小さい時から貧しい家庭でもとても苦勞して育ちました。でも、親孝行で勉強もしっかりして優れた知識と画才を身に付け、それを周りにひけらかすどころか人のため、藩のため、そして国のために尽くした人だということがわかりました。この中でも、僕が一番興味をもったのは画家としての華山です。どんな絵を描くのか気になったので図書館へ行き、画集を見ました。特に印象に残ったのは母親を描いた「渡辺栄像」です。座っている絵だったので少し小さく見えましたが、でも、真つ直ぐに先を見る目が優しいけれど、強い人のように見えました。もう一つ印象に残ったのは「孔子像」です。渡辺栄像と同じ人が画いたとは思えないほど美しい色使いと、今にも動き出しそうな生き生きとした絵でした。本の中に「りっばな絵をかくには、ただ手先ばかりではいけないのであって、体全体でかくという心構えが大切だ。」と書いてありました。僕も絵を描くことが好きなので、華山のように体を使って描いてみようと思います。

それから、華山が絵を勉強するきっかけにも興味をもちました。十二歳のころ、備前池田公の若君の行列にぶつかってしまいました。迷惑をかけないように自分の父や殿様の名を言わなかったことで乱暴

を受け、悔しい思いをしました。そこで、高い位につけるように寝る間も惜しんで絵や学問にはげんだそうです。同じ十二歳の僕には考えられませんが、何事もすぐあきらめてしまったり、途中で投げ出してしまったりするのは、華山の絵の才能は、大人になってから自分のためだけではなく人のために行動するとき役に立ちました。田原藩の借金を返済するために、すばらしい虎の絵を描き借金を無くしました。加藤六蔵に送られた「三千両の虎」と言われる絵は本物みたいですが、また、天保のききんでは自分の絵を売って米十俵を報民倉へ送ったり、暮らしに困っていた魚屋にお金を恵んで再び、商売ができるようにしたりしました。

華山は自分の生活も貧しいのに、人の心を理解し、人のためになろうと行動した優しい人です。この本を読んで、僕も華山のように人の気持ちを考えられるようになりたいと思いました。

最後に、華山は自分の悪口を気にしないで人の迷惑にならないようにと武士らしく腹を切って自分のどへとどめを刺して亡くなりました。華山が残したいいくつかの手紙には誰の文句も書いてなかったことに驚きました。華山が「華山先生」と呼ばれるのは勉強に励んだこと、それから自分のことより周りを大切にすることを学んだこと、それから自分のことより偉人とは、こういう人というのだと学びました。



「少年物語 渡辺華山」を読んで

童浦小学校 六年 前川 心響

人のために一生をつくす渡辺華山の生き方を読んで、ぼくは自分の生き方をふり返ってみました。そして、渡辺華山が偉くなれた理由も考えてみました。人はだれでも、自分の幸せや楽しさだけを考えて過ごしたいと思うし、楽な方へとなまけてしまいがちです。ぼくは学校で、教室の床に消しゴムが落ちていたら、拾って持ち主を探さなきゃと思いますながらも、「きつと自分で探して拾うよな」「ぼくが拾わなくてもだれかが拾ってくれるよな」と、気付かないふりをしてしまうことがあります。友達が転んでも、自分の遊びをもっと続けたくて、手をさしのべられないことがあります。確かにそうすることで、自分の自由な時間が減ることは無いし、楽しんでることをやめなくてもすみます。

でもこの本を読んで、渡辺華山のようにすごいことはできないけれど、ぼくにも人のためにつくすことができることに、気が付きました。落ちている消しゴムを見て見ないふりをしたら、だれかが困るかもしれない。転んだことを他人事だと思って声をかけなかったら、校庭に座り込んだままかもしれない。そんなことを想像すると、今の考え方は、きつと後悔すると思いました。落ちているものを、しゃがんで拾うこと、そしてだれかに聞いてみるのと。転んでいる友達がいいたら、自分の遊びは中断して、声をかけて保健室につきそってあげること。だれかがやらなければいけないことなら、自分がやろうと思えるようになりました。今のぼくでも、少し考えただけでも、人のためにつくせることが色々と

浮かんできます。人のためにつくすことをあたりまえのようにできるからこそ、渡辺華山は、とても偉くなれたのだと思います。

そしてもう一つの理由も分かった気がします。ごはんを炊きながら勉強したり、お父さんの看病をしながら勉強をしたりするほどの努力家だったことです。また、貧しくてかさが無くても、必ず仕事に休まず行く真面目さです。貧しいことをいいわけにして、なまけたりせず、一つ一つのことをしっかりとやり遂げたことが、渡辺華山が偉くなったもう一つの理由だと思いました。

ぼくは、この本を読んで、多くのことを考えるきっかけになりました。友達や家族など人のためにつくす時、自分の何かをぎせいにしなければいけないかもしれません。でも、それをするかしないかで、自分の運命が大きく変わっていくということが分かりました。「なさは人のためならず」ということわざを、国語の授業で習ったことを思い出しました。この本を読んで、人に親切にすれば、その相手のためになるだけではなく、やがてよい事となって自分にもどってくることが、本当にそうだなと思えました。

今のこの気持ちを持ち続けて、大人になっても後悔しない生き方をしようと思います。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

高松小学校 六年 渡邊 果愛

わたしは、華山先生のごことは本を読むまで知りませんでした。お母さんは中部小学校の卒業生で、華山先生のことをよく知っています。「立志」「板橋

の別れ」は、学芸会で代表の子が劇をしていたことを教えてくれました。高松小の近藤寿市郎さんと同じかなと思いました。寿市郎さんは銅像があります。華山先生にもあると聞いたので、お母さんに連れていってもらいました。銅像があるということ、寿市郎さんのように、言い伝えられている立派な人なのだと思います。

読み終えて、華山先生は、自分より他人のことを考えられる人、常に新しい考えを持っていた人だと思いました。そう考えた理由は三つあります。

一つ目は、田原藩で火事があった時のことです。この火事は、田原藩の江戸屋しきにまで燃え移って来るほどの大きな火事でした。その時華山先生は、自分の家のことを考えず、屋しきの中を駆け廻って防火の工夫をしました。わたしは、自分より他人のことを考え、すぐに行動に出る華山先生はすごいと思いました。火事などの時、人間はどうしても自分のこと、自分の身の安全を優先してしまうからです。

二つ目は、華山先生の代わりに田原へ行くことになった、真木定前に渡した「凶荒心得書」に書かれていた言葉です。「凶荒心得書」には、ききんの時、殿様や役人達はどうしなければならぬか、ということが細かく書かれていました。「一人でもうえ死にするものがあつたら、それは殿様の大きな罪であります。」というのや「百姓があるからこそ殿様があるので、殿様があるからこそ百姓があるのではありません。」という内容のものがあつた。華山先生の生きた時代は、殿様があるからこそ農民が安気にくらしていけるのだと考えられた時代でした。その時代の考えとちがう考えをし、その考えを広めようとするのは、簡単なことではありません。常に新しい考えを持っていた華山先生をわたしはそ

ん敬しました。

三つ目は、先生をねたむ鳥居達の悪だくみで、華山先生達が牢に入れられてしまった時のことです。汚くて、衛生に悪い牢なので、華山先生は「ひぜん」という病気になってしまいました。苦しく、大変な病気だったので、親孝行な華山先生は、自分がつかまってしまい母は悲しんでいるだろうと心配していました。わたしはこの部分を読んだ時、一つの理由と同じように、自分が苦しい時、相手のことを考えられる人はなかなかないので、本当にすごいと思いました。

華山先生は、殿様につくし、殿様のために亡くなりました。華山先生の決めたことはつらぬくという思い、自分より他人のことを考えられる優しい心、常に人たちがう考えを持つというところは素晴らしいと思います。わたしもそんな人になりたいと思うし、いつか、華山先生のかいた絵を見てみたいです。

あこがれの華山先生

田原中部小学校 六年 粕谷唯登

多くの通う田原中部小学校では、毎年学芸会で「板橋の別れ」と「立志」の劇を行います。ぼくはこれまで、劇の中の華山先生しか知りませんでした。が、この本を読んで、華山先生について新たに知ったことがたくさんありました。

ぼくは、昨年の自由研究で「報民倉」について調べました。天保のききんの時、作物が育たなくなり、食べるものがなくなりました。そこで、田原はんは大ききんに備えて穀物を備える「報民倉」を建てました。その結果、大ききんの時は田原はんは死

者がゼロでした。「報民倉」を作ろうとした華山先生はすごいと思いました。

そして、華山先生は田原はんの借金をなくすため、いろいろなことを考えました。産業を盛んにし、みんなのくらしを楽にすることが大切だと考え、講習会を開いて農業をする方法を教えてもらいました。また、華山先生は穀物を少しづつ貯めておき、困った人には分け与えたので、一人もうえ死にをしなかつたそうです。先のことを考え、よいと思ったことは実行するところがとてもかっこいいと思います。

「凶荒心得書」という書き物には、「一人でもうえ死にするものがあつたら、それはどの様の大きな罪であります。」や「百姓があるからこそ、この様がぜいたくをなさることができなのです」と言い、人民によって国が成りたつていく、という華山先生の考えがぼくはすてきだと思いました。

華山先生は困っている人を見つけると、自分のことのように心配し、助けていたそうです。ぼくは、自分の近くで困っている人を見つけたときに、自分だつたら助けてあげられるかわかりません。

これだけ周りの人々を助けてきたのに、華山先生は「無実の罪」で、ろうやに入れられてしまいました。でも、華山先生はろうやに入ることとはどうでもよかつたそうです。有名になると、うらやましがられたりして、かげ口や変なうわさを流されてしまい、周りの人に迷惑がかかるかもしれないからです。自分のことではなく、殿さまや家族のことを一番に心配をしていたのです。

ぼくは、自分の考えややりたいことを優先させてしまうことがあります。お母さんに注意されてもなかなか素直に話が聞けないことが多いです。華山先生のように、自分のことだけでなく、周りの人の

ことも考えられる、そして困っている人がいたらすぐに助けることができるような、思いやりの心をもつた行動ができるようになりたいです。

ぼくにとつて、今年最後の華山劇です。武士の行列にぶつかった時の華山先生の気持ちを考え、伝統ある華山劇を六年生みんなで心を込めて演じたいと思います。

華山先生みたいな大人になりたい

野田小学校 六年 山本優心

わたしは、華山先生の本を読んですばらしい人だと思いました。なぜなら、華山先生は先のことを読み、人のことを考えて行動するからです。

華山先生は、田原の人たちがうえ死にしないように報民倉を作りました。その後の年に大きききんがおこりました。でも田原ではうえ死にする人が一人もいなかつたそうです。わたしは、華山先生の報民倉の意見があつたからこそみんなが助かつたんだと思いました。先を見通し、行動する華山先生はすばらしいと思いました。

また、華山先生は、人が困っているとすぐ助けてくれます。ある日、一人の男の人が「ききんのときに妻が病気にかかり、年寄りもいて、お金もなくなり商売もできません。」

と、華山先生に助けを求めてきました。華山先生は気のどくに思い調べてみました。するとその男の人は昔さかな屋だつたことが分かりました。華山先生はさかな屋ができるようにお金をさし出しました。とても優しい人だと思いました。おまけにその人がお礼のさかなをさし出すと華山先生はそのさかな

をもらわずにお金だけ出して買って、

「さかなは売って明日のもどにして。」

とさかなを返しました。わたしは自分もまずしいのに、常に人のことを考え、思いやる華山先生はずばらしいと思いました。

華山先生は無実なのにろう屋に入れられてしまいました。とてもかわいそうだと思います。そのろう屋の中は衛生的によくないので、皮膚病になってしまいました。ろう屋を出た後もあまりよくなりませんでした。さらに

「罪人のくせに絵を売って金もうけしてる」

「罪人のくせに金もうけしてると、この様がばくふからしかられるぞ。」

などと悪口を言われるようになりました。自分が言われても平気でしたが、との様や家族に迷わくをかけたくないと考え、自ら自殺をしてみました。わたしは、ろう屋に入れられたのも、田原の人たちのことを考えて、自殺したのも、との様や家族のために行動したのだとわかり、ほんとうにすごい人だと思いました。華山先生がいなくなった後、悪口を言っていた人たちは、世の中がすっかり変わった後に、とても後かいいしたと思いました。わたしだったら、華山先生に謝って、弟子たちのように華山先生の後ろすがたを見ながらその後の人生を過ごしたいです。

この本を読んで、わたしなりに華山先生は、自分のことより人のことを優先してくれて、思いやりや優しさがあって、正しいと思うことを自分から率先してやってくれる、ほんとうにすばらしくて立派な人だと思いました。わたしも華山先生を見習い、すこしでも人のために行動できるそんな大人になりたいと思います。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

亀山小学校 六年 浅野 日菜



わたしがこの本を選んだわけは、渡辺華山先生ってどんなことをした人なんだろうと、気になったからです。そして、わたしは社会の授業でやる、歴史が好きです。なので、華山先生のことを知りたいと思ったからです。

わたしはこの本を読んで華山先生は、すごいと思ったことがたくさんあります。

一つ目は、病気をしているお父さんの世話をすることです。華山（虎之助）先生は毎夜お父さんのかたをもんだり、背中をさすっていたそうです。わたしは、家の人のお手伝いはお願いされればやりませんが、お願いされないとやりません。なのでわたしは、華山先生の行動を知りとてもすごいなと思いました。これからは、家の人に「○○して、」と言われる前に「○○やったよー」と言えるようになりたいです。このお手伝いが毎日づくようになんばりたいです。そして、華山先生のように、家の人にかたもみをしてあげたいです。

二つ目にすごいと思った事は、勉強をすることに対しての、熱心さです。華山先生のくらしは、な

んぎであったため本を買うお金がありませんでした。本が買えないのに、どうやって勉強したかという、先生や、友達に、本を借りました。そして、借りた本をうつして勉強したそうです。わたしは、今まで勉強なんかめんどくさいと思っていました。人に本を借りて勉強をしていた人がいたのに、自分は国から教科書ももらってとても、幸せだと思いました。無償で教科書をいただいているのに熱心に勉強しないと、もったいないと思いました。だからこれからは、苦手な算数で、少しずつ得意な物が増えるようにがんばります。

三つ目にすごいと思ったことは、だれにでも親切にするという心です。華山先生が、家老になった年に、大きな事件が起きました。それは、紀州藩（和歌山県）の船が大風にあつて、難破しました。その時にたくさん荷物が、渥美半島に流されて海岸の人は我さきに荷物を拾って家に帰りました。ところが紀州家の荷物を盗んだことになり、華山先生はこまってしまった。へたをすれば、ろう屋行きか、打ち首になってしまいます。華山先生は、紀州藩にわけを話しに行ったり、幕府に申しひらきをして、少しばかりのお金を出して内々にすませることが出来たそうです。村人は泣いて喜び華山先生へお金を出し合いお札に行くことにしました。ですが華山先生は貧しい村人からお金をもらうわけにはいかなかったため、「村で何か入用があったら使ってください」と村にあずけました。わたしはなんて親切な人なんだろうと思いました。

わたしはこの本を読んで華山先生のような心が広く、何事にも熱心で親切な人間になりたいです。そのために、つねに相手の気持ちを考えて行動出来るようになりたいです。

公益財団法人華山会
田原市博物館
田原市渥美郷土資料館
からのご案内

博物館平常展のご案内

十一月二十三日(土)～

令和二年一月十九日(日)

田原の美術 生誕百三十年 鈴木

翠軒の書(企画展示室一)

田原市出身の書家で、日本書道界の重鎮となった鈴木翠軒の生誕130周年にあたり田原市ゆかりの書などを展示。

田原の美術 郷土ゆかりの書家

(企画展示室二)

郷土ゆかりの書家の作品を展示。

華山を中心とする文人の書

(特別展示室)

書と画が一体となった渡辺華山と関係文人たちの書の魅力を展示。華山筆「東銘屏風」、「西銘屏風」などを展示。

二月八日(土)～三月二十二日(日)

ひな人形と初風展(企画展示室一)

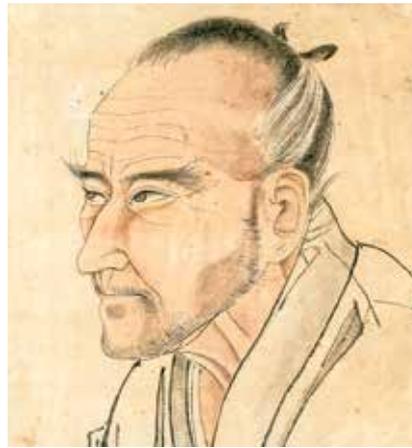
田原の旧家に伝わったひな人形や田

原風保存会制作の初風などを展示。期間中スタンプラリー開催。

同時開催・渡辺華山筆立原翠軒像稿を中心とする、椿椿系画家の肖像画(特別展示室)

(特別展示室)

平成30年度に寄贈を受けた重要美術品立原翠軒像稿(写真)。東洋画に近代的な肖像表現を導入した華山の技法と精神を受け継ぐ、椿椿山の「平山子龍像」、「吉村貞齋像」ほかを展示。



渥美郷土資料館企画展のご案内

十月二十六日(土)～十二月八日(日)

秋の企画展 渥美半島の戦争遺跡

(企画展示室)

渥美半島(田原市)に残された戦争遺跡について紹介します。伊良湖射

場関連施設、本土決戦に備えるための陣地ほか。

二月一日(土)～三月十五日(日)

企画展 第34回ひな祭り展

(企画展示室)

江戸時代から現代までのひな人形の変遷を展示。

イベント 着物を着ておひなさま

気分になろう 三月一日(日) 予定 県内の博物館・資料館をめぐるひな祭りスタンプラリーを開催します

【賞品有】

観覧料

平常時

一般 三二〇円(二四〇円)

小・中学生 一五〇円(一二〇円)

()内は二十人以上の団体料金

渥美郷土資料館は無料

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌

日)、展示替日、十二月二十八日

～一月四日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第四十三号

令和元年十二月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 大根義久

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江一二の一

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三二・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 令和二年六月一日